



Title	中国語教科書に見る「中国語」および「中国」：1950年代後半～80年代前半中国原編日本改編のものを中心に
Author(s)	王, 周明
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88369
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国語教科書に見る「中国語」および「中国」 —1950年代後半～80年代前半中国原編日本改編のものを中心に—

王 周明

1. はじめに

日本では、江戸時代の唐話学習から今日まで、広義的な中国語コミュニケーション能力を向上させるという目的から、中国語教本²は色々な形式で刊行され、その種類は二千を超えている。一方、1945年終戦後から1972年日中国交正常化までの三十年間近くの間、日本国内の中国語教育にとっては、主な発信先となる中国本土より直接入手可能な新しい情報が極めて限られていたため、停滞というほどではないかもしれないが、発展や前進という意味では非常に困難な時期にあったことは想像に難しくないだろう。

こうした状況の中で、転機を迎えたのは、中華人民共和国建国後、中国発外国人留学生用の最初の中国語教科書と言われている、1958年10月に中国の時代出版社による『汉语教科書 Modern Chinese reader』上下2冊の上梓である。この教科書は早くも日本に伝えられ、中の本文、例文および練習問題以外、新出単語に日本語の訳語・説明文の中国語原文が残るまま段落毎に日本語の訳文が付け加えられ、1960年11月に光生館によって日本語版『中国語教科書』上下2巻として刊行された。さらに、1969年に説明文の中国語原文を全部削除して上下2巻まとめて『合本 中国語教科書』一冊として再刊された。

『中国語教科書』の初刊行から十二年後、中国発専ら日本人学習者向けに作成した最初の中国語教科書『简明汉语三十课』は1983年3月に光生館によって出版された。本稿の執筆に当たって確認できた、『中国語教科書』上巻の1962年版にあった「昭和37年4月20日第5刷」、『中国語教科書』下巻の1961年版にあった「昭和36年5月20日第4刷」、『合本 中国語教科書』の1987年版にあった「昭和62年2月25日17刷発行」および『简明汉语三十课』の1990年版にあった「1990年2月15日12刷発行」という記録からその優れた利用実績を伺い知り、両者とも実質上当時のロングセラーと呼んでも過言ではなからう。

植田 2021 : 63 は以下のように指摘している。

外国語テキストは、執筆者が学習者に教えよう／伝えようとするその言語とそれにまつわる事柄が盛り込まれて編纂されている。多文化理解等の名のもと以外の情報も盛り込まれ、これらはしばしば「文化」ともよばれる。学習者は執筆者の目を通して目標言語を取り巻くものとしてそれらの「文化」に接することになる。…

…執筆・出版関係者の意識が選択的・複合的に学習者に「文化」として提供

¹ 本稿は科学研究費基盤研究 B 「異文化理解における外国語教科書の役割—中国語・ロシア語・朝鮮語を対象として—」(課題番号 19H012820) による研究成果の一つである。

² 中国語教本には、授業用の一般教科書の他、独習書や辞書なども含まれる。

され、学習者の目標言語観や当該言語文化圏観の形成にも影響を及ぼすと考えられる。

『中国語教科書』の初版から『簡明汉语三十課』の初版まで、時期的に1950年代後半～80年代前半、つまりおおよそ中国建国初期～改革開放初期に相当する。(？半)閉鎖的状态から経済的に開放しようとする中国は如何に外国人学習者への中国語教育を通して海外へ発信してそしてコミュニケーションを取ろうとするかを知るには、中国語教科書に基づいて検討するのは一種の有効かつ有意義な方法ではないかと考え、本稿では、『中国語教科書』と『簡明汉语三十課』に見る1950年代後半～80年代前半の「中国語」と「中国」について、言語本体と編集事情の両方から検討を試みる。

2. 二種の教科書に見る中国語の変化

2.1. 教科書の構成概要および位置付け

『中国語教科書』は説明、緒論、全72課、基本的文法の復習要綱、幾つかの付録³から構成され、全72課のうち、第1～8課は「語音」に関する内容、第9～12課は「口語練習部分」、第13～72課は「基本的文法」となっている。そして、編集者によるその学習目標設定については、上記発音内容と文法内容が教科書全体に占める割合からも分かるように、自ら発音と文法の教材と位置付けられ、「この本を修了した学生は発音と基本的文法のほかに、864の単語(746の漢字を含む)をおさめたことになり、簡単な口語で日常生活の用をたすことできるばかりでなく、わかりやすい文章を読みこなし、さらに進んで短い論文を学ぶことができるはずである。」⁴になっている。

『簡明汉语三十課』は序、まえがき、凡例、本文に入るまえの課(発音+漢字)、第1～30課、「词汇总表」から構成され、第1～30課は本文+文法(+補充)から構成されている。そして、編集者はこの教科書の性質を「中国語を学習する日本人のために編んだ簡明な基礎中国語テキスト」⁵と明記し、その内容構成の特色を「中国語の基本的な文法のほとんどすべてが盛り込まれている。テキストの本文は口頭語を主としており、いきおい会話を占める比重が大きい、内容が生活の各方面にわたっており、会話の能力を高めるのに一定の効果をあげることができるはずである。」⁶と説明し、さらに日本人学習者にとっての一番の難点

³ 1960年版と1969年版の付録の数と内容が異なる。1960年版の4つの付録のうち、付録2「漢字とその組み合わせ一覧表」、付録3「本字と略字の対照表」と付録4「語の連記の規則」は1969年版になくなる。1969年版の6つの付録のうち、付録2「主要語彙索引」、付録3「事項・術語索引」、付録4「語法関係用語対照表」、付録5「簡化字表」と付録6「偏旁簡化表」は新たな追加。

⁴ 『中国語教科書』の「説明」部分(まえがきに相当する)による引用。

⁵ 『簡明汉语三十課』の凡例1による引用。

⁶ 『簡明汉语三十課』のまえがきによる引用。

として、「各種の補語が日本人にとっては、中国語を学習する上でのポイントであり、学習者はあらゆる機会をとらえてくり返し練習し、中国語の「補語概念」をマスターすることが最も望ましい。」⁷まで指摘している。

2.2. 『中国語教科書』に見る拼音（ピンイン）表記と簡体字

『中国語教科書』の画期的な意義の一つはまさに新しい音声表記法と簡略化漢字を採用したことにある。この2項目は1960年前後において、外国人学習者にとって前代未聞のものだけでなく、中国人にとっても斬新なものだった。

2.2.1. 拼音表記の採用およびその社会的意味

この新しい音声表記法は拼音（ピンイン）と言い、ローマ字のアルファベットと声調記号で中国語の共通語の漢字の読み方を表し、今日世界中の外国人中国語学習者が中国語の発音を学習する際に必ず利用する方法となっている。

拼音以前の正式な音声表記法は漢字の古い形に基づいて作られ、1918年に制定された注音符號である。注音符號もすでに完成度の高い音声表記だが、やはり中華民国の大陸時代の国語政策の一環になっているため、当時の中国では代替されたいものとなった。そこで、1958年2月11日の第1期全国人民代表大会第5回会議で漢語拼音法案⁸が採択され、『中国語教科書』の編集者も採択の半年後いち早く発音内容に採用した。

但し、漢語拼音法案が採択されたのと同時に、『全国人民代表大会が漢語拼音法案に関する決議』⁹も可決され、「漢語拼音法案は漢字を学習する共通語を普及するための補助的道具として、先ず師範学校と中小学校で教習し、教習経験を積み重ね、同時に出版業などでも逐次普及し、実践の過程において法案の更なる改善を求め続けるべきだ。」¹⁰という内容が含まれている。結局2月の漢語拼音法案の採択から8月の『中国語教科書』の編集完成まで、半年間という短い経過時間を考えると、師範学校と中小学校での拼音教習実践活動と並行するというより、むしろ中国語教科書の出版のほうが先行した事実を認めざるを得ないだろう。また、視点を変えれば、国内建設より国際連盟国を優先する中国政府側の一貫の姿勢をここからもある程度推察できるだろう。

2.2.2. 繁体字・簡体字の使用概況に見る漢字簡略化の実態

⁷ 『簡明汉语三十課』の凡例8による引用。

⁸ 中国語原文：漢語拼音方案

⁹ 筆者訳。中国語原文：全国人民代表大会关于漢語拼音方案的決議

¹⁰ 筆者訳。中国語原文：汉语拼音方案作为帮助学习汉字和推广普通话的工具，应该首先在师范、中、小学校进行教学，积累教学经验，同时在出版等方面逐步推行，并且在实践过程中继续求得方案的进一步完善。（筆者追記：中国語原文には一部簡略化されていない繁体字も使用されているが、ここでは簡体字に統一した。）

1956年1月28日に漢字簡略化法案¹¹が国務院によって公布されてから『中国語教科書』の編集完成まで、4回にわたって517の簡化字が発表され、全国の新聞・雑誌・図書に正式に使用されていた。『中国語教科書』もこれらの簡化字を使用している。¹²

こうした中で、『中国語教科書』の漢字使用状況からも分かるように、2年半以上の時間が掛掛かって517の簡体字が出来ていても、数膨大の漢字からしてまだまだ足りない。1960年版『中国語教科書』の段階では、大ざっぱに調べにより、下記の状況が明らかになってきた。例えば、

- ・食偏の漢字、言偏の漢字、馬と馬偏の漢字、門および門構えの漢字、見と見を含む漢字、貝と貝を含む漢字、易を含む漢字は簡体字になっていない。
- ・糸偏・金偏の漢字、車および車偏の漢字は、「練／繼／鐘／輛」が「练／继／钟／辆」に取って代わられた以外、繁体字のままになっている。

要するに、この時期、関連する漢字が多いため、偏旁の機能を兼ねる漢字の簡略化には慎重な態度が示される様子だった。それにしても、漢字簡略化の作業がやはり進められ、1969年版『中国語教科書』になると、偏旁の機能を兼ねる漢字の簡略化はほぼ完了して、その状況が付録5「簡化字表」と付録6「偏旁簡化表」に反映されている。

中山時子・戸村静子 2001 は拼音と簡体字の普及意義を中国国内の状況に着目して下記のように評価している。

中国では解放の前後を問わずその近代化を阻むものの一つに、漢字の学び難さと方言群の複雑さがあった。…漢字の簡略化、共通語の制定、簡体字にローマ字による発音記号を綴り合わせて注音し、共通語の普及を計る…「漢語拼音法案」の公布となり輝やかしく結実する。大衆にとって漢字は学びやすくなり、共通語は拼音を媒体として普及し、方言群による近代化への停滞は昔話となった。¹³

母語話者の中国語習得とは異なり、外国人学習者向けの中国語教育にとって、拼音と簡体字の習得は中国語学習の重要な一環とは言え、ウォームアップにも相当する。その後の語彙表現を文法ルールのもとでの正確運用こそが正念場になる。

2.3. 語句表現に見る時代的色彩の変化

2.3.1 人間関係の面において

(1) 『中国語教科書』の中で、親族呼称の言い方は全く出現せず、人間関係に関係する語としては、「同志」「先生」二語は最も高い頻度で使用されている。

「同志」は時代語として、長期間にわたって使用されている。殆どの辞書では、「同志」の使い方について、中国人相互間の呼び方、名前・役職名・職業などにつけて用いるという

¹¹ 中国語原文：漢字簡化方案

¹² 『中国語教科書』の「説明」部分による。

¹³ 中山時子・戸村静子 2001：pp.4-5 による引用。

類いの説明になっている。しかし、本教科書では、「班上的工作同志（＝クラスの役職を担当するもの）就把他介绍给我了。」（第48課の課文2）「合作社的工作同志（＝協同組合の店員さん）把糖给我包起来了。」（第53課の例13）さえ「同志」を付けられたのに対して、数回も出ている農民の話しでは、どの場面でもストレートで「农民」となり、「同志」の言い方が全く使用されていない。農民が職業ではなく、階層や身分を表し、つまり、農民に対する差別が一般民衆の間に暗黙的に存続している故だろうか。

「先生」は主に後の中国語「老師」に取って代わられる、教鞭を執って人々に教えるものに使用されるが、ちょっと文脈が曖昧になって高名な学者や知識人などに対する敬称として用いる可能性が存在する箇所もしばしばある。例えば、「先生从礼堂前边儿过去了。」（第52課の例2）、「先生叫我念下去。」（第53課の例14）など。いずれにせよ、伝統文化よりの継承である。『中国語会話初級』と『簡明汉语三十課』になると、「老師」が教鞭を執るものを指し、「先生」は外国人男性に対する敬称に変わった。

(2)『簡明汉语三十課』では、親族呼称をはじめ、非常に豊富な人間関係の関連語を提示している。「爸爸/妈妈/哥哥/弟弟/老爷/祖母/兄弟/姐妹/亲戚/家属」のほか、「小姐/太太/先生/夫人」などもある。

2.3.2. 日常生活場面において

(1)『中国語教科書』に見られる日常生活場面が非常に限られており、娯楽・体育に関係する語句として「跳舞/唱歌/看电影/演电影/演員/话剧/音乐会/票/首都劇場/人民劇場/溜冰/颐和园」が挙げられたが、何処までは一般民衆にも簡単に実現できるのかのことを考えると、一層理想図のように思われるだろう。

買い物に関係する語として「糖/水果/鉛筆/鋼筆/本子/百貨大楼」のほか、「进城/城里/城外/合作社」が特に印象的である。「进城/城里/城外」は関連語彙で、口にしないといけないような出来事を連想させる。例えば、「你在城里看了电影没有？」（第27課の課文3）「同屋进城用了十块钱。」（第62課の練習3）「合作社（＝協同組合）」も時代語の一つである。普段の買い物でしたら、「合作社」は欠かせない唯一の買い物先のように目に映り、例えば、「学校的合作社也有鋼筆卖」（第43課の課文2）、一般店を指す「商店」はなかった。『中国語会話初級』と『簡明汉语三十課』になると、「合作社」がなくなり、「商店」が代わりに買い物の場面に登場している。

移動手段の関連語として出ている「船/飞机/自行車」とは別に、「汽車」は普通乗用車の意味のほか、バスの意味でも色々な文例に用いられている。例えば、「劳駕，这辆汽車是去哪儿的？」（第32課の課文1）「这种最新的大汽車坐得下八十人。」（第58課の例12）『中国語会話初級』と『簡明汉语三十課』になると、「車」に分類が行われ、「公共汽车/出租汽车/火车/软卧/硬卧/餐车」のように、語彙表現の正確度も上がっている。

(2)『簡明汉语三十課』では、北京市内の天安門広場観光に合わせて中国祝祭日をまとめて提示、瑠璃廠での買い物に合わせて文房具名称を追加、郊外の万里の長城遊覧に合わせて

外出手段を紹介、天気についての雑談に合わせて天候関連語を紹介、電話を掛けるや電報を送るシーンに関する郵政用語の補足、レストランでの食事に合わせて料理名の紹介、試合の観戦に競技名の提示、京劇の鑑賞に合わせて芸術関連語の紹介、診察のシーンに関係する医療用語の補充など、多様多彩な生活場面が用意され、それぞれ弾ける会話が出来そうな語句表現が提示され、枚挙に暇がない。北京以外の上海などの都市も年長者の誕生日祝いも視野に入れて触れてみた。

2.3.3. 中国対外国の関係について

外国人学習者向けの教科書として編集できたが、編集者側が学習側の諸般事情を実際に何処まで想定できたのだろうかについては、相手国との関係に影響された場合が多い。それ故、相手国との関係もある程度教科書の内容を通して現れる。

(1)『中国語教科書』は冷戦が続く厳しい政治的環境に囲まれる中で編集できたが、そこに見る「外国」の概念を言語化すれば、語彙的に抽象的な「外国」と具体的な「苏联」、「俄文」に二分される。一方、文例においての「外国」は具体像を持たず、中国と何らかの関係を持つという殻以外、中身を感じてもらえない存在となっている。

他說中国話，說得跟中国人一樣，我沒有聽出來他是外國留學生。（第 53 課の例 20）

我們可以看到最新的、外國（的）進步（的）電影。（第 60 課の例 19）

到中國來訪問過的外國朋友都很喜歡北京。（第 70 課の例 5）

他方では、「苏联」、「俄文」が含まれ文例が多数あり、他国や他言語に触れる文例は一つもない。そこで、国籍を聞けばソ連人と返事、外国のメディアと言えばソ連の新聞・雑誌・図書、外国の娯楽とと言えば、ソ連の映画・歌が独り占め、外国語（専門）とと言えばロシア語、来中留学生とと言えばソ連学生、外国（留学）に行くとするれば、行き先はソ連。このように、様々な文例において何度も繰り返されることによって、ソ連とロシア語は中国にとって唯一無二の友邦や頼りになっているようにも読み取れるだろう。これはまさに当時の中国とソ連の連盟関係の教科書への投影として理解できれば、中国が一方的ソ連に愛想を振りまくと解釈するのも可能だろう。

俄文報（第 15 課の例 5）

我學習俄文，我有很多俄文書。（第 16 課の課文 2）

她是哪國人？她是蘇聯人。（第 19 課の課文 3）

他會中文，也懂俄文。（第 20 課の課文 1）

他懂俄文，他說俄文說說得很好。（第 21 課の課文 1）

你們學校有多少（個）蘇聯學生？有二十二個蘇聯學生。（第 22 課の課文 2）

他們唱不唱蘇聯歌兒？唱，他們唱蘇聯歌兒。他們會多少蘇聯歌兒！他們會很多。（第 23 課の課文 3）

什麼電影？是蘇聯電影嗎？不是，是中國的。（第 24 課の課文 1）

從蘇聯來的學生都在這個宿舍裡住。（第 28 課の課文 3）

我同屋和一个苏联学生坐在我旁边。(第 33 課の課文 5)
大家都知道他要到苏联去。(第 39 課の例 6)
我的朋友到苏联去过。(第 40 課の例 4)
我有一个中国朋友叫张伟,他是俄文专业三年级的学生。……那个时候儿,我还不会中文,
我们就用俄文谈话。(第 48 課の課文 2)
他姐姐派到苏联去学习了。(第 66 課の例 3)
他就学过俄文,别的語言都不懂。(第 66 課の例 15)
誰俄文好,誰就给参观的人作翻译。(第 67 課の例 9)

極端的に考えると、『中国教科書』に見る中国とロシアまたは外国との関係はコミュニケーションのもとで出来たものというより、むしろ中国側が一方向的に押しつけてできたように見える。そこで、他連盟国が完全に無視され、ソ連だけが一際目たった状況になった。

(2) 1980 年代に入り、中国は建国 30 数年以来最も明るい国内・国際環境下であり、日中友好関係も順調に発展しつつ中で、『簡明汉语三十課』の編集発行があった。先人の成果を生かし、日本人学習者のことを念頭に置いて編集を行ったため、所々で中日コミュニケーションによる相互作用が見えている。例えば、

第三課「去中国」の会話本文では、木村は見送りに来た先生に両親を紹介し「这是张老师,这是我的爸爸,这是我妈妈」、お母さんは木村の語学留学に嬉しく思う気持ちを言葉にした「他去学中文,我们也很高兴。」

第十五課「谈天气」の本文で北京の四季の雑談が終わった後、補充会話練習のところで日本の花見のお話を導入してアウトプット練習を作った。

第二十課「交易会」の本文では、その頃日本人の間で関心が高くなっているシルクやコットン 100%の服装見本市を用意し、商社マン夫婦の社会&文化見学にした。

他に、内容上、日本人の言い方が出ているから、適宜にアメリカ人やイギリス人の言い方も紹介、上海の話しのついでに、廣州と日本の大阪や神戸をも提示。要するに、編集者の意図によって、教科書は適当に世界を視野に入れ、インプットとアウトプット交代でバランスよく異文化交流の橋架けとなっている。

上記の語句表現の対照を見た限り、もし『中国教科書』に見る中国の 50-60 年代の色彩を堅苦しい灰色に譬えれば、『簡明汉语三十課』に映ったのは希望に導かれて柔軟性が増しているカラフルな中国像だと言いたい。

3. 編集者の表記に見る編集側の事情変化および集団・個人に関する意識の変化

教科書の内容は編著者の立場や視点などの事情によって変わりうるため、本節では、編著者の事情を教科書を影響する外部要素として検証してみることにする。

3.1. 『中国語教科書』の編集者表記の変更事情について

1960年初版の『中国語教科書』上下2巻本の表表紙には、編集者に「北京大学外国留学生中国語文専修班編」と記されているが、1969年からの『合本 中国語教科書』においては「北京語言学院編」と記し変わった。

この変化は、北京語言学院の設立経緯と直接に関わっているものだ。フリー百科事典『ウィキペディア』で調べて見たところ、北京語言学院設立前、中華人民共和国建国直後の1950年に、後の学校設立に関わる教育者たちが清華大学で東欧交換生中国語文専修班を開設した。1952年に外国留学生中国語文専修班として北京大学に編入され、1961年に北京外国語学院（後の北京外国語大学）に編入された。1962年に外国留学生高等予備学校として創立、1964年に北京語言学院に名称変更された。1966年、文化大革命により実質上停校となったが、1972年再開された。

つまり、編集者チームはもとのままの顔ぶれで外国留学生中国語文専修班として北京大学に所属する期間中に「漢語教研室全員」¹⁴で『中国語教科書』を編集したが、『合本 中国語教科書』の頃はすでに北京語言学院所属になっていった。国の割り当てや調整に服従するという中国の慣例はこの事例でもおよその見当が付くだろう。

ここで、もう一点を注意されないのは、編集者チーム所属の起点となる東欧交換生中国語文専修班の開設背景である。「東欧」の概念は時代によって大きく変わるが、冷戦時代（第二次世界大戦後～旧ソ連崩壊（一説））においては旧ソ連型社会主義圏のヨーロッパ東部に位置する国々のことを指す。共に旧ソ連型社会主義圏というカテゴリに属するため、同圏内の言語交換生を互いに受け入れることを通して、相互の仲間意識を高めて連盟関係を固める狙いも間違いなく存在していただろう。そこで、中国語文専修班開設の当初、ともに旧ソ連型社会主義圏に属す東欧諸国からの交換生のみを対象として中国語教育を行う想定したのだ。但し、そこから僅かに2年後、北京大学への編入と共に、双方向性の交換を単方向性の留学へと方向が変更され、中国語文専修班の対象名目が東欧交換生から外国留学生に広がった。一方、中国語教育対象名目上の広がりとは対照的になり、『中国語教科書』の内容はこうした建て前とは別の事実を語っており、むしろ編集側の実際に持っていた政治意識と教育理念との乖離の現れでしょう。以上の2節を参照。

3.2. 『简明汉语三十课』の編集者表記に見る集団・個人に関する意識の変化について

専ら外国人学習者への中国語教育を担当する独立部署という位置付けになると、北京語言学院はその後にも幾つかの中国語教科書を編集したが、編集者表記の方針に徐々に変化現れる。

1960年『中国語教科書』など：編集者チームが基本的に一つのかたまりに団結

¹⁴ 同注4。

して執筆分担者員名を明らかにしない

↓↓

(1976年『漢語初歩』など：著者に北京語言学院と明記)¹⁵

↓↓

1982年『中国語会話初級』など：表で依然として「北京語言学院」と表記しながら、「説明」部分（まえがきに相当する）に個々の執筆分担者名をまとめて提示する

↓↓

1983年『簡明漢語三十課』：表表紙で「北京語言学院副教授金德厚主編」のように、「肩書き＋個人名＋主編」という形式で表記しながら、まえがきに下記の通りに個々の執筆分担者名および分担箇所を明示する。

「本テキストの執筆者は次の通りである。（筆画順）

呂才楨 本文一部執筆

楊建昌 練習一部執筆

… …

金德厚 全体のまとめ」

権力連鎖において、常に権力の頂きに立つのは個人だが、改革開放の初期までは、中国社会の一般民衆の間では集団至上というイデオロギーが植え付けられていた。つまり、個人対集団の際に、個人は無条件に集団に従う、個人より集団のほうが權威を持つや絶対的優位に立つなどのことを意味する。それ故、教科書編集のような協同作業になってくると、最高責任者または総合責任者が実際に存在したとしても、個々の個人名よりも集団として表記するのも当時の主流からして全く問題が無いただろう。他方では、『簡明漢語三十課』のように、慣例の集団ではなく、個人として最高責任者または総合責任者が責任を取る、分担の責任所在を明確にするという個人責任制への動向は、それまでの集団全体に重きを置く主流を突破し、改革開放の成り行きに順応するものとも言えよう。

4. おわりに

本稿はここまで、大きく異なる時期不同の二種の中国語教科書を検討して来た。

『中国語教科書』と『簡明漢語三十課』の教科書本体ともその言語表現に含まれる文化的内容は濃厚な時代的色彩を帯び、タイミングが良く日本人学習者または研究者の中国語知識への飢えに応え、ロングセラーになっていた。前者はさらに中国建国後の同類教科書の中で開拓的な性質を持ち、特に現代中国語の基礎表記となる拼音と簡体字を果敢に採用し、その海外普及に大きく貢献していた。

それぞれ編集者側の情報検討は異なる視点から二種の教科書にみられる内容的または形

¹⁵ 図書検索情報による。実物確認待ちのため、括弧付きとする。

式的特徴を確認できた。そこから逆に言うと、言語と文化が変容し続けるものなので、教科書も変わらないといけないだろう。

【検討対象とした中国語教科書（刊行順）】

北京大学外国留学生中国語文専修班・光生館編集部[編]1960『中国語教科書（日本語版漢語教科書縮刷版）上・下巻』、光生館、上巻：1962年第5刷＋下巻：1961年第4刷

北京語言学院・香坂順一[編]1969『合本 中国語教科書（日本語版漢語教科書縮刷版）』、光生館、1987年第17刷

商務印書館[編]1973『基礎漢語』、株式会社満江紅

北京語言学院[編]香坂順一[改編]1982『中国語会話初級』、光生館 1993年第6刷

金徳厚[主編]1983『簡明汉语三十課』、光生館、1990年第12刷

【参考文献】

荒屋勤 1979「《汉语教科书》の語法重点と補足説明資料 —《基础汉语》《汉语初歩》との比較—」、『大東文化大学紀要〈人文科学〉』第17号：pp. 135-154

植田晃次 2020「(研究ノート) 朝鮮語テキストの日本語表記法の記述小攷—規範と言語事実のはざまの風景—」、『批判的社会言語学の探訪(言語文化共同研究プロジェクト2019)』、大阪大学大学院言語文化研究科、pp. 43-54

植田晃次 2021「朝鮮語テキストの地図小攷 —理念と現実のはざまの風景—」、『批判的社会言語学の対話(言語文化共同研究プロジェクト2020)』、大阪大学大学院言語文化研究科、pp. 63-74

小野秀樹(2018)『中国人のこころ —「ことば」からみる思考と感覚—』、集英社

川上久寿 1980「ソ連の中国語教科書」、『大東文化大学紀要〈人文科学〉』第18号：pp. 187-202

澤田田津子 1999「日本語教科書の中の「日本」」、『日本語の地平線 —吉田彌寿夫先生古稀記念論集—』、くろしお出版：pp115-128

菅野敦志 2013「台湾の「拼音論争」とアイデンティティ問題 —国際化と主体性の狭間で—」、『アジア太平洋討究：(後藤乾一教授退職記念号：アジアのなかの日本 日本のなかのアジア)』第20号：p227-242

中山時子・戸村静子 2001『中国語発音字典』、東方書店

ヘレン・スペンサー＝オーティアー[編著]、浅羽亮一[監修]、田中典子ほか[訳](2004)『異文化理解の語用論』、研究社

張西平[主編]2019《漢語作為第二語言教学史研究》、商務印書館